アサクサヤマ

Objectives

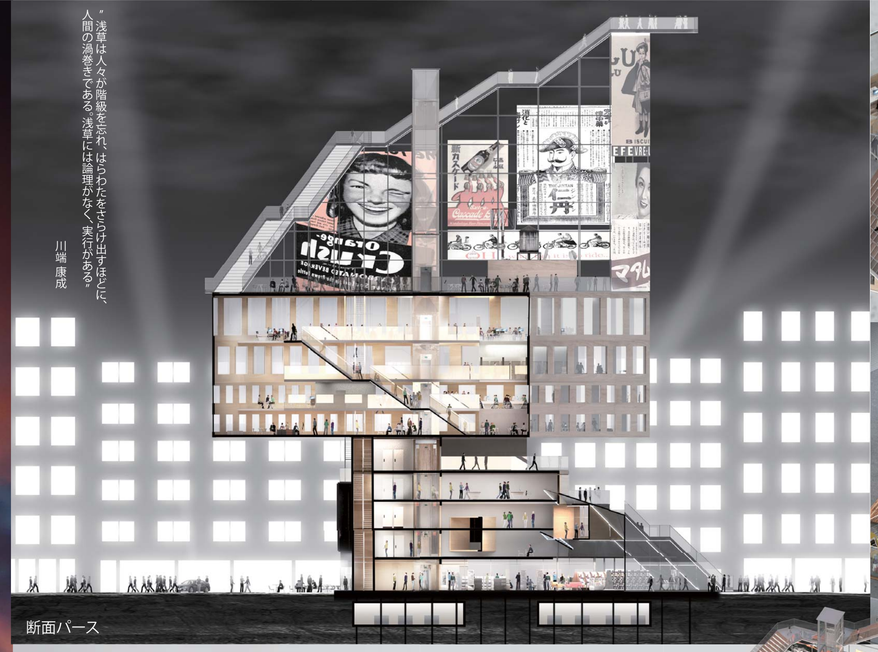
明治期、浅草6区に聳えた凌雲閣は、当時の浅草の商業的繁栄を象徴する存在でありました。
古くは浅草寺の五重塔から、花やしきや仁丹塔、最近では隅田川を挟んで位置する東京スカイツリーなど、浅草は特徴的な塔やビルが立体的な都市のシルエットあるいはランドマークとして、存在を認められてきました。
この設計提案ではこのような浅草のスカイラインの新たな一部となり、一方で形態のシンボル性だけでなく、観光客や地域住人、庁舎と商店、など浅草らしい、様々な人やプログラムが立体的に折衷し、通りのにぎわいが上層まで続く一つの「山」のような設計を目指しました。

建物を包み込む大階段　始点と頂がオーバーラップする

階段は建物の内外を貫き、用途にあわせて幅を変動させる

内部は用途に合わせて、立体的な連続性を持つ

"浅草は人々が階級を忘れ、はらわたをさらけ出すほどに、人間の渦巻きである。浅草には論理がなく、実行がある。"
川端 康成



断面パース

上層階アイソメトリック

「ピロティ」空間　滞留する人々

1. Site Inventory&Analysis
浅草の文化と現状

明治時代以降、浅草は東京屈指の繁華街、劇場街として発展してきた一方、近年は渋谷や秋葉原などでの若者文化の発展により、かつての文化の中心地としての地位は失われてしまった。

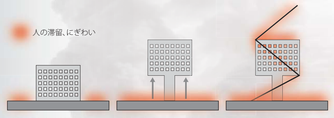
その一方でかつての文化のレガシーを武器に観光地としての賑わいを見せており、浅草寺の祭りなどのソフト面に加えて、モダンと歴史の折衷的でシンボリックな浅草らしい街並みと界隈性が、街の魅力を高めている。

浅草のスカイラインを象徴する建築

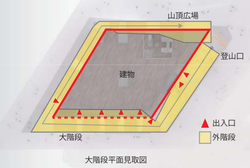
敷地と周辺の関係

2. Designing of "Gregarious"
"にぎわい"を取り入れる建築計画

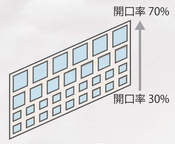
①立面+プログラム
極めてシンプルな建築操作で、浅草6区の界隈性、にぎわいを建物に取り入れる。京都駅大階段や、台湾苛介石記念館などのように、階段に座ったり登ったりすること自体を一つのアクティビティ化するため、外階段は建物のアイコンとなる。



例　京都駅大階段



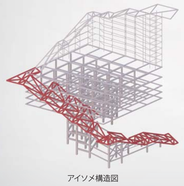
大階段平面見取図



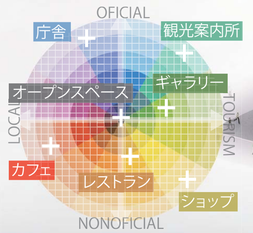
ファサードアイソメ図

③大階段
建物を包み込むように、GLから最高地点(63.4m)まで連続する屋外階段は、必要なキャパシティに合わせて幅を変動する。建物の中にはいり込んだり、逆に建物が階段から飛び出たりと、空間に多様性と、立体的な連続性を与えている。地上の界隈性を建物内部や上部に吸い上げるような役割を果たす。

④ファサードと階高
上階にいくにつれて、階高が高くなる。比例して正方形の窓は開口率が高くなり、より景観を見せやすくなる。建物外からは、ガラスの反射で空が映ることとで、建物の上部の圧迫感を軽減する。

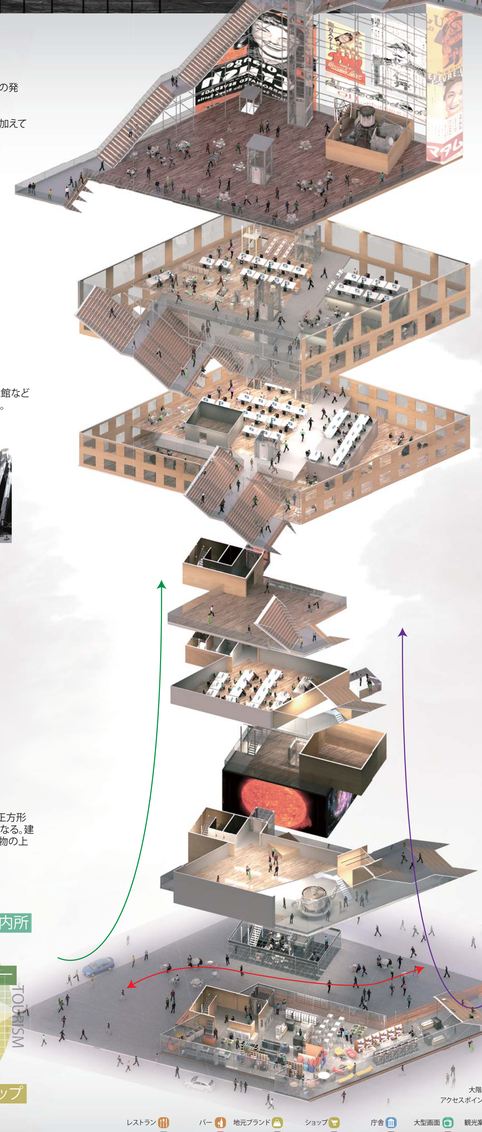


アイソメ構造図



⑤構造
浮いている上部構造物を軽量化するためS造とする。外階段は、外付け耐震ブレースのような働きをし、構造本体と相互に支え合うよう、建物に張り付いている。

①行政と民間 ②住人と観光客
2軸でのゾーニングを表すカラーチャート

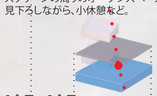


3. Zoning
ゾーニング計画

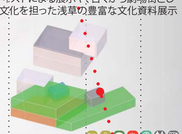
7合目～頂上
屋上広場は広大なオープスペースとして市民や観光客に開放される。ときにフリーマーケットやトークショーなど、様々なイベントが開催される。最高地点(63.4m)からは360°、浅草寺や墨田川を跨いでスカイツリー、西側では新宿高層ビル群まで都内を一望できる。

5合目～6合目
台東区役所の観光促進課などの庁舎機能とカフェやレストラン、ショップが大階段や交互に連続するボイドを通じて、立体的な繋がりを持つ。階層が上がるにつれて、天井高と開口率が上がり、用途も明るくオープンな空間に合わせたものへとシフトしていく。

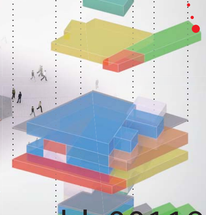
4合目
区役所機能の一部及び、小さな屋外空間をを持つ。大型スクリーンの周りのオープンスペースに滞留する人々を見下ろしながら、小休憩など。



2合目～3合目
大型ディスプレイの上のオープンスペースは浅草6区でも最も賑わいのある通りに面し、周辺の活気を感じとることができる。大階段からもアクセスできるギャラリーでは、地元アーティストによる展示や、古くから劇場街として東京の下町文化を担った浅草の豊富な文化資料展示もされる。



1合目
地上階は広大なピロティや、腰掛けることができる大階段、広告、区の様々な情報を映し出す大型スクリーンが、通行人の滞留を生む。主に地元住人が訪れるショップやカフェ等と観光客が訪れる観光案内所は完全に分離はされておらずピロティを通じてやわらかにつながっている。



hlc00119